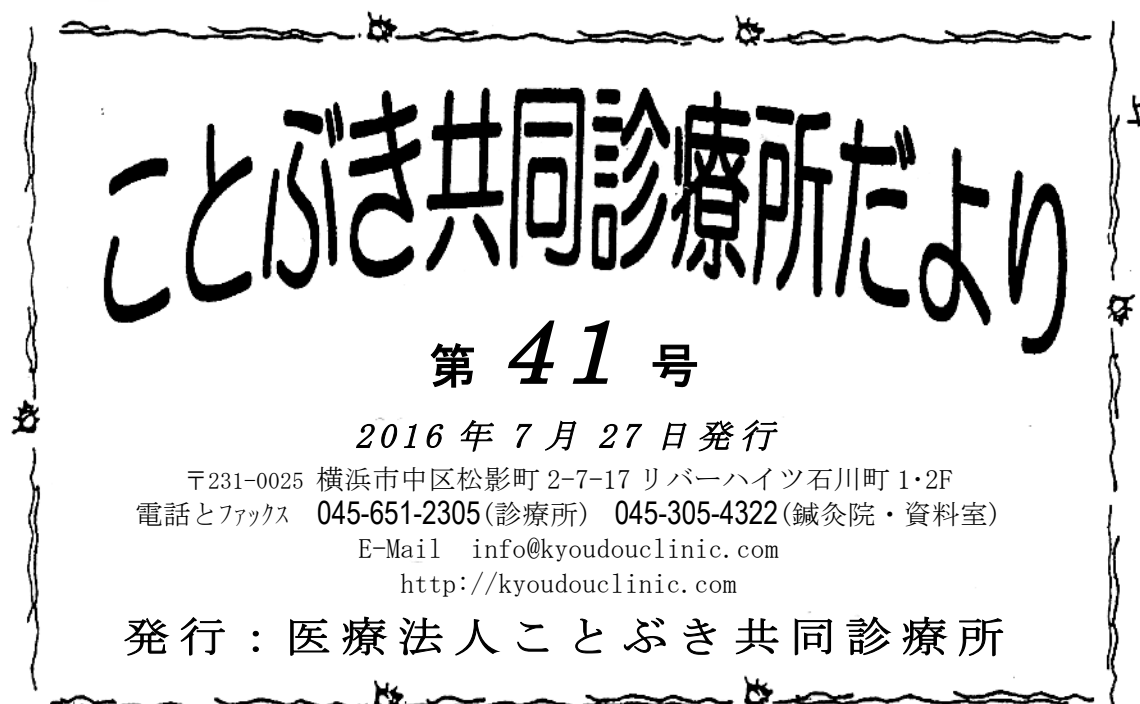




目 次

開設して 20 年が経ちました	鈴木 伸 ②
20 周年の会開催される	松本 一郎・船崎 葉子 ⑥
今年の稲子の田植え	下田 一輝 ⑨
“診療室から” (37) - Mr.Kopitto -	浜本 和子 ⑩
李さん、逝く	佐藤 八州子・矢島 雅子・橋本 等 ⑪
職員自己紹介	鈴木 吏津子 ⑭
寿町地域ニュース・あらかると ('15 年 11 月～'16 年 6 月) ..	松本 一郎 ⑭
診療所日誌 ('15 年 11 月～'16 年 6 月)	矢島 雅子 ⑮
共同診療所・鍼灸院ガイド	⑯



開設して 20年が経ちました

【診療所は20周年をむかえました】

1996年に誕生したことぶき共同診療所は、今年の4月で20周年を迎えました。そしてみなさんが今読まれているこの「診療所だより」は今回で41号となります。記念すべき第1号は96年の7月7日に発行されました。その後、年2回発行され今に至ります。「小さいことからコツコツ

と」(by 西川きよし)

が私の座右の銘ですが、毎日、毎年の積み重ねが、気が付いてみると大きなことにつながっているような気がします。とても「パーフェクトヒ

ューマン」にはなれませんが、今後も気負いすぎることなく、大リーグのイチローのように当たりまえのことを当たり前にクールにこなしていけたらいいなあと思っています。今後もお付き合いのほどよろしくお願い致します。

さて、20周年を迎え、「初心に帰る」ということで、診療所設立当初の状況を振り返ってみましょう。

元院長の田中俊夫は昭和40年(1965)から8年間、横浜市の「寿生活館(当時)」という、生活相談所に勤務していましたが、当時、寿町の人々にとって、一般の医療機関

が、かなり掛かりにくいものであり(違和感を持って迎えらる等)、またそのためあって、治療の中断が多く、一般地域の人々に比べて、かなり若年で死を迎えてしまう人々が

ことぶき共同診療所設立趣意書

- (1)時間的・場所的・応対的に患者さんが来やすい診療所にしていくこと。いわゆる敷居の低いこと。
- (2)こちら側からも随時訪問し、往診・相談していくこと。
- (3)必要があれば、適切な他の医療機関に積極的に紹介活動をする。
- (4)福祉事務所・保健所のみならず、地域における諸施設・諸活動と密に連携を取っていくこと。
- (5)発想を狭い意味の医療にとどめず、極力、来訪者の抱える困難な諸問題に目を向けていくこと。
- (6)ボランティアの方々を積極的に受け入れ、運営は合議によって行っていくこと。

多かった。このため「何とか医療をもっと身近な、隣の家に行くように気軽に掛かれるものにしていきたい」との切実な願いがありました。

そこで、以前から寿町にて活動していたボランティアグループで知り合っていた仲間や医療・福祉関係友人と協力し、1995年11

月に設立準備会を発足。「ことぶき共同診療所設立趣意書」を作り、6 つの基本方針を決めました。そこには「時間的、場所的、応対的に、患者さんが来やすい診療所にしていくこと。いわゆる敷居の低いこと」が診療所の基本的な理念とされました。そして、翌 1996 年 4 月の開設となりました。

(ことぶき共同診療所ホームページより引用)

この時の基本方針は、今でもいろあせることなく、診療所の目指すべき方向が書かれています。まだまだマンパワー不足で不十分なところがありますが、今後でもできるだけこの理想に近づけていければと考えております。

それから 20 年。当初は精神科・内科だけで、しかも夜のみの診療でしたが、日中が主体となり、いろんな方々が人伝に、あるいはホームページを見て少しずつ手伝ってくれるようになりました。まさにアメーバのように増殖し、現在は整形外科(週 1)のみならず、鍼灸院、精神科デイケアも併設するようになりました。

去る 6 月 19 日には、ここまで診療所を育ててくださった関係者の方々への感謝と苦労を分かち合うために L プラザにて、診療所の 20 周年を祝う会を開催させていただきました。(20 周年記念誌も刊行予定です。)

相変わらず毎日の診療では次々と難題が襲ってきますが、皆様と力をあわせ

て少しでもお役に立てるような活動をしていきたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

【診療所の古くからの患者さん李正任(イ・チョンニン)さん亡くなる】

診療所に長年通う李さんが亡くなりました。李さんは診療所開設当初からの患者さんでした。当初は治療につながっていなかったものの、前院長田中先生をはじめ多くの方々が長年根気よく付き合う中で次第に信頼関係ができ、自発的に服薬やデイケアの通所ができるようになったのでした。李さんは非常に儉約家で自分の食べるものを極力控え、浮いたお金を息子さんに渡すことを生きがいにしていました。お腹が減っているのではと思い「大丈夫？」と聞くと、「ダイジョーブダヨ」と笑顔で答えるのが常でした。

去年の夏、普段なら何を聞いても「ダイジョーブダヨ」しか言わなかった李さんが珍しく「アシガイタイヨ」という訴えを繰り返すようになりました。足を診察しても特に異常がなく「変だなあ」と思っていたが、内科の先生が診察してくれた結果腹部に大きな腫瘍が見つかりました。病院で精査し、悪性腫瘍が強く疑われました。病院の先生も丁寧に説明してくれて、治療をすすめてくれたのですが、李さんは治療を希望されず、経過観察となりました。

当初は元気だった李さんも徐々に弱っていき、ほぼ皆勤で長年通い続けたデイケアも来れなくなってしまいました。入院を勧めても拒否があり、やむを得ず訪問看護を入れ、往診でフォローしました。いよいよ食事がとれなくなり衰弱するに至ってようやく入院に同意され H 病院にお願いすることになりました。すでにかなり弱っていたので、すぐにでも亡くなってしまうのではと心配していました。しかし、李さんがすごかったのはそれからです。入院すると食欲が復活し、在宅時よりも元気になったのです。一瞬は奇跡が起こったのかと思いましたが、しかし、病魔には勝てず 4 月 28 日に永眠されました。

今でも診療所に笑顔の写真が飾ってあるのですが、それを見るたびに「ああ、本当に亡くなってしまったのだなあ」とさみしい気持ちになります。ご冥福をお祈りします。

【鍼灸師の鈴木さんがやってきた】

長年勤めていただいた鍼灸院の佐藤さんが退職され、寂しかった鍼灸院に新しい職員さんが来られました。鈴木吏津子さんです。もともと服飾関係の仕事をされていたのですが、仕事のし過ぎで体

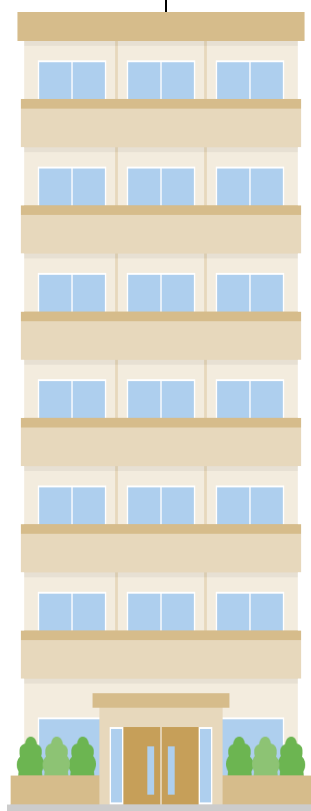
調を崩され、それを鍼灸で直してもらったのが鍼灸師を目指したきっかけだそうです。自らの病の体験を生かして、患者さんの目線にたった治療をしていただけたと思います。今後もよろしくお願いします。

【福祉の後退？ ドヤの特別基準廃止・金銭管理の中止】

昨年 2015 年 7 月 1 日から、国の生活扶助基準の見直しを受けて、住宅扶助基準の改定が行なわれることになりました。この国の方針を受け横浜市でも「見直し」が行われ、結果これまで約 2,200 円/日まで認められていたドヤ代が、原則約 1,700 円/日までしか認められなくなりました。

私の患者さんでも、種々の理由でドヤを移らざるを得ない方がいらっしゃったのですが、この「改正」のためになかなかドヤをかわれず、このままでは「社会的入院も止む無し」というところまで追い込まれました（結局、あちこちの方々の努力のおかげで何とか回避できましたが）。

ドヤにいる方々の中には、様々な理由で一般アパートにはなかなか移れない方が多く、また、熱心な帳場さんや、設備



の整ったドヤでどうにかぎりぎり生活できている方も多いのが現状です。受け皿も用意できないうちに、このような選択肢を著しく狭めるようなやり方はいかななものかと思います。すぐにアパート設定してもらえないので「ドヤがだめなら入院したらよろしいんじゃないの？」とでもおっしゃっているのかと勘ぐってしまいます。（最近の研究ではマリーアントワネットは「パンがないなら・・・」というセリフは言っておらず濡れ衣であったようです）。

また、最近では、以前役所でしていた金銭管理も中区で原則やらない方向となっていました。他区での金銭管理をめぐる数例のトラブルがあり、役所としてはトラブルを極力回避したいという気持ちは理解できなくもありません。しかし、様々な現場で「金銭管理」は、障害者の方々が生活を送っていくためのキーポイントになっており、金銭管理をしていただいたおかげで入院を回避できていた方も多くいました。十分な代替施策がない中でこのサービスがなくなってしまうと、治療においても様々な問題が起こることが予想されます。困難な背景を抱えた患者さんが病院や施設ではなく、狭い部屋ながらも一般の地区で生活できるという、誇るべき寿町の福祉システムも、ここに来て曲がり角に来ているのかもしれないと思うと表情が暗くなってしまう今日この頃です。

【田中俊夫先生亡くなる】

このだよりを読まれている方々にはすでに情報が届いているかもしれませんが、当診療所を立てた田中俊夫先生が本年 6 月 23 日、76 才で亡くなりました。

去年の診療所忘年会まではとてもお元気でいらっしゃったのですが、1 月以後急速に体調を崩され、ついに逝去されました。

あの穏やかな声がもう聴けないと思うと私としてもさみしい限りです。田中先生が掲げた「寿の人に必要な、敷居の低い医療を提供する」という理念に立ち返りながらこれかも診療にあたりたいと思います。そして田中先生のご冥福をお祈り申し上げます。

（鈴木 伸）



20 周年の会開催される



6 月 19 日、11 時から L プラザで当所の「20 周年の会」が開かれました。

出席者には、「ことぶき共同診療所設立趣意書」と「ドンパン節（寿版替え歌）」「花は咲く」の歌詞が配られました。

まず、矢島雅子さんより、出席が叶わなかった名誉院長の田中俊夫さんの 20 周年記念誌原稿が読み上げられました。

診療所ができるまでの経緯が簡潔に書かれている文章でした。「寿町の人々の役に立ちたい」という思いから、1975 年頃に医学部への受験勉強を始め、87 年 4 月山梨医大へ進学し、93 年 3 月に医師免許取得した後研修医となり、95 年 10 月設立準備会を経て、96 年 4 月 1 日の診療所開設に至ったこと。ここまでで約 20 年間がかかりましたが、何とか開設まで漕ぎ着けたこと。“皆で担いでいる診療所”としたかったため、あえて「共同」を入れたこと、などです。

次に、現院長の鈴木伸さんより、田中

俊夫さんと鈴木さんが医者になるまでのこと、原点となった医療班活動、診療所設立までの経緯、設立趣意書の説明、「10 年前まで」と「その後現在まで」の比較を中心に、スライドを使った説明がありました。

鈴木さんの“和ませトーク”が今回も炸裂しながら、診療所のほとんど全ての活動、関わってきた人の紹介が網羅的に、そしてその意味や意義も含めて行われ、「やっと 20 歳になりました」と感慨が述べられました。

この後は、篠笛に導かれて、デイケアメンバーと職員が壇上に上がり、大合唱です。寿の四季を雄弁に語る「ドンドンパン」、2011 年 3 月の東日本大震災で生まれることになった「花は咲く」を披露し、日頃の練習の成果がでて会場に響き渡り盛り上がりました（このあと船崎さんより詳細報告があります）。

最後に、会場の方々から、診療所との関わりや思い出を語っていただきました。

クリーンセンターの須田さん、岡さん、港町診療所の早川さん、現旧の横浜市福祉事務所ワーカーの石川さん、高橋さん、杉浦さん、児島さん、神奈川病院の田中さん。ありがとうございました。20 周年の会は終了をむかえ、「味菜」での懇親会に移りました。

外部からは、74 名の方々にご出席いただきました。ありがとうございました。

(松本 一郎)



どんどんぱんぱん どんぱんぱん

先日、ことぶき共同診療所創立20周年会の会場で、我らデイケアメンバーは、歌のご披露をさせて頂きました。

デイケアのメンバーが、本気で「歌うこと」になったきっかけは、プログラムに来て頂いている篠笛奏者・松尾慧さんの伴奏で、震災復興支援ソング「花は咲く」を歌い始めた頃からのように記憶しています。「花は咲く」は、歌の世界に自然に引き込まれる力のある楽曲です。デイケアメンバーの皆さんも例外ではなく、むしろこの歌に寄り添うように毎回、歌ってくださいます。ここ数年は、デイケアのテーマソングと言って過言ではないほど、実は歌い込んでいたのです。それぐらい、

この歌はメンバーに欠かせない歌になっていました。

さて。デイケアには、もう一つ「朗読」というプログラムがあります。演劇ワークショップの活動をなさっている花崎攝さん、俳優の豊田一也さんに来て頂いて、プログラムを進めています。実際は、朗読を座って聴くだけではなく、メンバー自身、チャンバラで切れ侍を演じてみたり、谷川俊太郎の詩を題材に言葉遊びをしつつ、表現に繋がる可能性を楽しみながら探っています。今回、篠笛プログラムで歌っていた、秋田民謡「ドンパン節」の歌詞を、ことぶきデイケアオリジナルバージョンにしたらどうかと、花崎さんから提案がありました。なので、デイケアやことぶき地区の季節の行事、それぞれの生活が垣間見られる言葉を皆で探して行きました。「エアコン設定18℃」、「もち代貰って宝くじ」など、彼らの実体験を、花崎さんが歌詞に盛り込むと笑顔が見られ、歌声にわくわくと楽しい響きが帯び始めました。どんどんぱんぱんどんぱんぱん。そして、自分達の歌が完成したのです。このように、情熱溢れる講師陣の強力なサポートを得て、始めてあの日のお披露目にこぎつけたのです。

あの日、舞台上からメンバーの皆さんは、私たちと一緒に、大きな声で歌ってくださった方々の笑顔を見ることは出来た

のだろうか、会場一杯の温かく大きな拍手を覚えていてくれるだろうかと、心密かに思いつつ。

いずれにせよ、メンバーの皆さんにとって、楽しい時間であったのならば嬉しい限り。

皆様、お疲れ様でした。

そして、会場にいらした皆様、温かい歌声と大きな拍手を本当にありがとうございました。

(船崎 葉子)

今年の稲子の田植え

今年も無事に稲子の田植えが終わりました。デイケアからの参加者は4名のみでしたが、その分スタッフの子どもが7名参加し、平均年齢はぐっと若くなった1泊2日旅行でした。途中、診察を終え電車で現地に駆け付けた鈴木先生も加わり、総勢17名での静岡バスツアーとなりました。偶然にも精神科デイケアと集団保育？が同時に行われる感じになり、これって最先端治療モデル？と思わせるもの（俊夫先生は狙っている？）になっていました。利用者さんのなかには、「みんな大きくなったね」とか、「子どもばかりじゃね〜か？」と言いつつ歓迎ムードの方など、雰囲気良く、歴史ある“いつもの稲子のデイ”になっていました。

田植えの方とはいうと、天気は曇り、ブヨ多め。いつものように佐藤さんご夫婦、石井ドライバーさん、増田さん、静岡大学の学生さんらの協力で、最後は水を張るところまで行い、きれいな田園風景を見せて頂きました。病気対策ということで2種類の苗が植えられました。今年はわけあり？とのことでしたが、根がしっかり張った良い苗でした。ひとり一往復ぐらいの緩いものでしたが、ちょうどいい作業量ではなかったかと思います。体重のあるS氏は田んぼの泥にはまり、どのすじを植えたか一目で分かり大笑い。K氏は苗を配る役目をしてくれたりと、各々が“らしい働き”をしてくれました。続けて同じ場所に来て、同じ作業が出来るところが稲子デイのいいところです。休憩中、「この米は自分らも食べているんですね。」と、そんな感想もふとありました。

温泉の後は恒例のカレー作り。K氏手作りのサラダ付きです。利用者さんが作ってく

れたものを頂けるのは、私は今回が初めてでした。中にはルッコラの手作り野菜の新鮮な香りが加わり、デイケア内では作れないオリジナルなものになりました。手回しよく、いろいろなものを用意して下さったスタッフにも感謝です。

食休みには、自分の身の上を話し出す方、故郷と稲子の違いについて話したり、自転車旅行に行った時のことを話す方など、ハイ状態ではなく、自然と話し出してくれる感じでした。精神的な体調を気にされていたN氏も、トランプをして緊張がほぐれたのか、楽しい時間を過ごすことができました。結果的にはいつもよりは体調を崩すことなく、稲子の旅行を終えることができたようです。

2日目。子ども達は朝の散歩やニワトリの世話を楽しみ、大人たちは美味しい空気でタバコを吸い、ゆっくりとした時間を過ごしました。その後は朝霧高原で美味しいソフトクリーム、作り立てチーズ、ピザを堪能しました。昼食は朝の残りご飯をおにぎりして、皆で太陽の下で食べました。子どもたちにも、大人たちにもそれが自然な感じ。夏の稲子も楽しみにしています！（下田 一輝）

“診療室から”(37)

Mr. Kopitto



「アンニョン・・・ナイスポニーテールヘア」と、髪をアップにまとめているチャーミングな看護師に声を掛けて、処置室に入ってきた。今日もいつものように、ちょっぴり赤ら顔だけれど、元気そうな〇さんが、血糖測定・インスリン注射・内服のために毎日通ってきている。私たち看護師も「アンニョン」と笑顔で挨拶をする。私は、アンニョンの後に「こびっとしてますか」と付け加える。

最初に私がこの〇さんと会ったのは、5・6年前、「昨日も転んじゃやった…」と膝小僧から出血、そして処置している傷の上からまた転ぶという繰り返しだった気がする。時には転び方が悪かったせいか、顔面まで傷やら青あざになっていることもあった。治りもなかなかで、この頃は、よく「もう久保山だあ」と言っていた。久保山？ なんのことがわからなかったけれど、今思えば、体調も悪く、弱気で落ち込んでいたのかも知れない。

その後、デイケアへ行く日、役所へ行く日などのスケジュールが立てられ、規則正しい生活になったせいか、小ざっぱりとした身なりになり、転ばなくなり…そしてイクセロンパッチ効果で？（と私は思っているのですが…）、英語も滑らかに、こびっとしている様子だ。

このこびっとという言葉は、2・3年前のNHKの‘花子とアン’という朝のドラマで使われた山梨の方言で、‘しっかり’という意味だそうだ。〇さんが山梨出身と言っていたのを思い出し、その言葉で声を掛ける。そして、若いころ自衛隊で英語を使う部署にいたとか、それで英語がお得意なんだ、なるほどね。ハングルは、と言えば、行きつけの飲み屋さんの韓国の人がやっているらしい。これもなるほど。

今日も首から下げている、スケジュール表を見ながら、「今日は役所だ、ペイデイだあ、アイムアリッチマン！」と。周りにいる看護師たちに、「いいな、いいな」と言われ、ちょっぴり照れくさそうに処置室から出ていく。「ハヴァナイスデイ！！」と言いながら。

（浜本 和子）



李さん、逝く

李さんの思い出

共同保育・いなこ農場 佐藤 八州子

李さんが亡くなった。李さんのことを想う時、いつも考えることは、韓国から夢を抱いて日本にお嫁に来たであろうに、思うようにいかずつらかったろうなということです。

私たちが李さんと知り合ったのは、三十余年前、彼女の息子Kが三才の頃でした。共同保育が稲子に移転する前のことです。すでに李さんは精神を病んでおり、日本人の夫とも別れてKを一人で育てることは難しいと、通っていた保育園から相談されました。最初は李さんが勤めに行く早朝連れて来て、夕方迎えに来る、私たちが保育園に送迎するという形でした。その頃の李さんは、幻聴があるらしく大きな声で外に向かって韓国語と日本語の混じった言葉で叫んでいました。Kはオムツが取れず、その交換もしていない状態でした。徐々に彼女の病状からKを二十四時間共同保育で生活させ、彼女が通うという形になりました。

その頃の李さんの一貫した考えは、働いてよい生活をする。Kを手離さないということでした。彼女の病状ですから、勤め先も転々としたようです。でもやめさせられてもすぐ次の仕事を探して来る、その執念にはいつも驚かされました。又、「Kをよい学校に行かせて、大きなマンションに住む」ということをずっと云っていました。正に「スカートの風(チマパラム)」と云われた韓国の教育ママそのものでした。

Kが十一才の時に共同保育が稲子に移転した時には大変でした。田舎の小さな学校に転校してきたのですから――。月に一回は電車で稲子に来ましたが、ある時Kの

ランドセルと大切なアルバムを持って帰ってしまいました。彼女の心からの抗議の表明だったと思います。

最初に会った頃三十代前半だった李さんは、花柄のワンピースなどが似合う美しい人でした。日本語も日本の文字も来日前に学んできたようで、頭の良い人だと思いました。アパートにはキムチのカメがたくさん並んでいました。ワタリガニの料理やチヂミを作ってくれたこともありました。韓国に時々里帰りもして、そんな時には子どもたちに必ずおみやげを買って来てくれました。

病状が安定していたら、もっと韓国の料理や言葉を教えてもらったり、家族のことや彼女の思いを語り合えたのにと残念に思います。

しかし、晩年は、大好きな俊夫さんの診療所で、皆さんにお世話になり、最後まで手厚く看取っていただき、本当によかったと思います。

今、三十五才になるKは独立して私たちから離れて行きましたが、李さんと似ているのでしょうか。転々としながらも、仕事は絶やさず働いているようです。

李さんへ

李さんと初めてお会いしたのは、診療所が開設する前年の越冬のことです。藤枝さんから「李さんに電話をして、何か欲しい物はあると聞いたら“うーにゅー”と言ったまま返事がなくなっちゃった」とのお話。早速、李さんの家に向かうと、李さんは今よりの二倍くらいの大きさに全身が浮腫んでいました。俊夫さんがずっーと入院の説得を続け、ようやく越冬テントに救急車が呼ばれました。

そしてその次の年、また李さんと連絡が取れず、玄関には鍵がかかっていたため2階まではしごをかけ、窓から侵入するという、またまた救出劇がありました。

入院先の本牧クリニックで、以前は絶対に飲まなかった毎日自分で飲むことができるようになっていました。

1999年5月11日、デイケアがオープンします。この頃、李さんはまだ入院中でした。退院日の6月18日、李さん初めてのデイケアです。それから去年の10月に動けなくなるまで、17年と4か月ほぼ毎日通っていました。もちろん、最長です。

息子さんのいる稲子へも行事のたびに一緒に行きました。稲子へ行くと、エプロンをキュツとしめ、食事を作り稲子農場の八州子



さんに“ママー”と呼ばれ、我が家に帰ってきた感で立ち振る舞っていました。静かに過ごしているデイケアでの李さんとは別人です。息子さんに会える時でもありました。息子さんが独立してからは、いくら誘っても、全く行かなくなっていました。

お泊まり旅行にも一緒に行きました。お出かけもいっぱいしました。

ここ数年は毎日デイケアに来ていても寝ていることが多く、お出かけする事も少なくなっていました、口にはしなかったけれど身体が辛かったのかもしれない。

最後にデイケアにいらしたのは、4階から1階に引っ越した当日。階段のない4階に住んでいて、体力の低下と共に外へ出られなくなった李さん、数ヶ月にわたる説得の上、大家さんの協力の下やっとお引っ越しすることができました。車いすで登場した李さんは「おはよう」と元気な姿を皆に見せ、一日を過ごしました。貫禄を感じます。でもやはり、辛かったのでしょう。それから、入院までの間、訪問看護師さんとヘルパーさん、診療所のデイケアにみまもられ、家のベッドで過ごすこ

とになります。

李さんは、最期まで元気でした。入院してから、たくさんの人に会えました。異国での生活は苦労が多かったでしょう。でも、そんなことは一切口にはせず、力強かったです。

李さんの死後、韓国のご家族に連絡を取ろうと思い、韓国領事館に相談をしました。領事館の方は諸事情を考慮し、親身に相談に乗ってくださり、地元警察にも連絡を取ってくれ、ご家族の安否確認をしてくださいました。

残念ながらご両親とお姉さんはすでに亡くなっており、弟さんも入院中で連絡が取れる状態ではない旨のご連絡を頂きました。

李さんの熱くて大きな、そして身内を心から大事にする人柄は、生まれたときから培われたものなのだなと思うのです。

李さん、ご両親にお会いできましたか？

(矢島 雅子)

李さんが 亡くなってしまいました。

李さんは数年前から食は減り、体も痩せ、デイケアでの殆どを李さん用に敷かれた二畳の畳の上で寝て過ごしていました。過去にも何度か体調を壊しては復活してきた李さんですが、昨年夏にお腹に腫瘍がある事がわかったそうです。しかしその後も入院せず、自分の部屋で一人で暮らし、訪問看護や診療所の医療スタッフ、そしてデイ職員の見守りを受けながら暮らしていました。がまん強い方でした

昨年末。私「が李さん痛くない？」と聞くとさすがに顔を少し歪めて「うん」と返事をされました。その後すぐに入院となったのでそうとう痛かったことだと想像するのですが、それでも痛みを耐えていらっしゃいました。

息子思いの母親でした

李さんの息子は他県で暮らし診療所とは殆ど無縁状態になっていましたが、李さんの支給日に訪ねてくる息子の事を心待ちにし

ていたようです。息子の為に煙草を用意したり、金銭も渡していたようですが「息子さんが来るのよ」とよく言っていました。

こんな李さんを思い出しました

16年前、私が診療所で働きだした時には李さんはすでにデイケアにいらっしゃいました。その当時は一緒に料理を作りました。近所のスーパーへも一緒に買い物に行きました。キムチが好きで、ちじみを作っていました。餃子も上手でした。何しろ手際がよく料理上手でした。

韓国へ時々帰国していました

7・8年前くらいまではパスポートの申請をし、おしゃれをして帰国していました。お土産たくさん用意したのかなあ。

真知子巻

おしゃれな李さん。真知子巻が似合っていました。デイのお出かけの時にも真知子巻をしていました。

天気予報

雨が降りそうなときは傘に長靴。お昼の天気予報は欠かさず見ていました。「李さん、明日の天気は?」「晴れるよ」李さんの天気予報はよく当たりました。

エアロビでは先頭にたって

元気だったころ、李さんは先頭になって体を動かしていました。鏡に映る自分の動きも

充分とらえていました。調子によってはお茶や音楽など様々なプログラムにも参加。山下埠頭から乗るシーバスは大好きでした。

毎年稲子に行っていました

特に稲刈りでは稲を結ぶ麻紐切を自分の担当に決め、数百本の紐を切ってくれました。

苗字と呼び捨て

女性職員にお願い事があるときは「〇〇さん」と優しく苗字で声掛け。普段は名前や苗字を呼び捨ての李さん。なんだかかわりやすかったなあ。

替え歌

歌が上手だったそうで、時には俊夫さん、藤枝さんの替え歌(?)をよく歌っていたそうです。

そんな李さんでした

この数年は、ほとんど寝て過ごす様になってしまった李さん。食事も口に運んでくれるものが少なくなりました。でも、カレーやプリン、バナナなどは食べてくれました。

「元気ですか～」と聞くと「元気ですよ～」と答えてくださり。帰り際には「さよならね～」と言って帰って行った李さん。

「李さん。いろいろ、ありがとね～」

(橋本 等)



職員自己紹介



鈴木 吏津子

5月からことぶき共同鍼灸院の一員となりました。鍼灸学校卒業以来の友人である新井さんに声をかけていただきました。以前から、こちらについてのお話を聞かせてもらっていましたが、働くということで、新たな縁を作る機会をいただいたと思っています。

私が鍼灸師になろうと思ったきっかけは、私自身の腱鞘炎を治してもらったことです。当時、東洋医学の本を読んで、こういう考え方って面白い！ それだけでした。その後、

だんだんと自分もやってみたい、ほかの人を治せるように、助けになりたいと思うようになりました。施術については、まだまだ勉強不足で、何年たっても反省は尽きないのですが、その時の自分の最善を尽くすということは肝に銘じています。

ここでは、精神科の先生方をはじめ、様々な職種の方たちが一緒に働いています。まだどんな仕事があつて、どんなふう to 患者さんたちと接しているのかなど、わからないことだらけですが、朝のミーティングに参加していると、温かい心、気を感じます。

それがここ、ことぶきの基本なのだと思います。私もその基本を忘れずに、鍼灸師としてできることをしたいと思っています。よろしくお願いします。

寿町地域ニュース・あらかると (’15年11月～’16年6月)

【国の貧困対策関係】厚労省は昨年5月の川崎簡易宿泊所火災を踏まえ「居住の安定確保支援事業」(2013年度開始)を拡充し、簡易宿泊所等からアパートへの転居支援を強化(予算5.3億円、補助率3/4)[4月]【センター(寿町総合労働福祉会館)】寿町供養塔は徳恩寺へ移転[3.9]／センター閉館[3.25]により寿町診療所・図書室・娯楽室等は松影公園の仮設施設へ移転し開館[3.28]、寿労働センターはLプラザ1階へ、寿クリーンセンターはMMビル1階(寿町3-9-7)へ移転[4月]【はまかぜ】神奈川県国済会、第3期目の指定管理者(5年間)として運営開始[4.1]【野宿者】1月実施の全国調査によれば横浜市内の野宿者は536人(うち男性521人、女性15人)[1月現在]【簡易宿泊所】横浜市、簡易宿泊所に立ち入り検査実施(消防局114施設(対象119施設中)、健康福祉局41施設、建築局16施設)[5.17-18]／白樺荘建替新築予定[6.30現在も更地]／東日本港運横浜営業所跡地に簡宿建築予定(あさみ館とロイヤル石川の間)[6月解体中]【調査レポート】梶川浩「寿地区簡易宿泊所街の高齢化と課題(第二報)」(横浜市政策局『調査季報』177号)[’15.12]【選挙】森英夫氏、参院選神奈川選挙区で立候補(社民党公認)[6.22公示]【医療】山中修氏、第4回日本医師会・産経新聞社赤ひげ大賞受賞[’15.12.16]【花いっぱい運動】『サポーターの会 合冊本2』刊行[4月]【介護】株式会社横浜ケアセンター「訪問介護 浜っ子サービス」設立[1.1]

※ 寿町に係る国・自治体の政策等も一部含まれます。

(寿町関係資料室 松本 一郎)

診療所日誌 '15 年 11 月～'16 年 6 月

11 月 秋の気配、体調を崩す人が多いです。 (40 号からの続き)

- 11 月 24 日 第 12 回天ぷら祭り
11 月 25 日 寿福祉まつりにデイケアも参加。いしもちを売る

12 月 病院訪問続けています

- 12 月 4 日 本牧病院に病院訪問
12 月 11 日 忘年会
12 月 22 日 ターミナルの T さん譫妄状態となり、入院先から逃亡
12 月 25 日 デイケア、クリスマス会

2016 年 1 月 今年もよろしくお願いします

- 1 月 6 日 糖尿病の N さん家、お菓子の家からお総菜の家へ。いつも食べ物あふれています。お金をやっと訪問看護師さんに預けてくれることになりました
1 月 23 日 Dr. 田中、最後の診察になる
1 月 26 日 デイケア李さん、本牧病院に入院

2 月 今年もインフルエンザ流行っています

- 2 月 3 日 ドヤで紙を詰めたり大便をしたり、火を出したりの W さん、大量の荷物と共に入院を試みるが断念。荷物は捨てました
2 月 5 日 佐藤病院訪問

3 月 借金を巡る騒ぎがうごめいています

- 3 月 2 日 デイケア、そごう美術館へ。心なしかみなオシャレ
3 月 5 日 看護師日下さん、土曜午前中勤務開始
3 月 10 日 山梨大学の学生さんへ Dr. 鈴木講義
3 月 23 日 心不全、腎不全で全身浮腫んでいる F さん、受診・服薬・体動すべて拒否。土屋 Dr. 往診でやっと採血実施

4 月 診療体制変わります。Dr. 天田、毎火隔週に

- 4 月 7 日 血糖上昇中だった N さん、桐生に行くと出発。途中警察に保護され弟さんの家に移送されて一泊して帰宅。久しぶりの兄弟再会となりました

た。

- 4 月 13 日 M さん、名古屋の病院を 12 年ぶりに退院
4 月 21 日 アルコールの A さん、飲み過ぎてドロドロ。部屋に送り届けた職員に「一緒に飲もう」と誘う
4 月 26 日 アルコールの A さん、S さん訪問の度に焼酎ボトル没収
4 月 28 日 李さん、H 病院で亡くなる。韓国にいらっしゃる親族と連絡を取るため韓国領事館に連絡

5 月 取材関係でのお問い合わせが増えていきます

- 5 月 9 日 李さん茶毘に付される。職員も立ち会う。
5 月 10 日 鈴木さん、鍼灸師として勤務開始
在宅酸素になった N さん、まだ受け入れられないようで、酸素をつけずに診療所へ参上。ハアハアです。
5 月 17 日 インフルエンザ発生。もう 5 月なのに。
5 月 18 日 先ほどの N さん、息も絶え絶え。肺炎も起こし入院。
5 月 19 日 N さん、危篤との連絡でコスモスさん駆けつけるが、奇跡の復活を遂げる
5 月 28 日～29 日 デイケア、稲子へ田植え。職員の子どもの参加多く、賑やか

6 月 20 周年の会を見届けて、俊夫さんが旅立ちました

- 6 月 2 日 患者 I さんの家、南京虫大発生。宿に問い合わせると、ゆめ会館本館の管理人さんが全力で駆除に取り組んでいることが発覚。
6 月 3 日 デイケア I さん、知人にたかられているようで引っ越しを快諾。が、ドヤの特別基準がなくなった今、一般基準から特別基準の部屋への転居が難しいことが発覚。
6 月 8 日 朝並んでいる人が、立ションをして困ると苦情あり
6 月 14 日 田中俊夫さん入院。
6 月 19 日 診療所 20 周年の会開催。外部から 74 名の参加あり。俊夫さんに色紙とビデオレターを送る。
6 月 23 日 田中俊夫さん逝去
6 月 27 日 田中俊夫さん葬儀

(矢島 雅子)